（公財）日本習字教育財団　観峰館

令和三年度秋季特別企画展

文人の行き交う街

ぶんじんのいきかうまち

―近江商人が紡（つむ）いだネットワーク―

会期　九月十八日（土）～十一月二十一日（日）

前期　九月十八日（土）～十月十七日（日）

後期　十月十九日（火）～十一月二十一日（日）

展示出品リスト

＊パンレットの完全版は、下記ＱＲコードを読み込んでください。

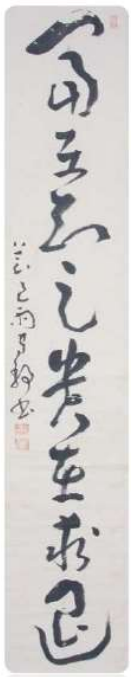
文人ネットワーク相関図

秋季特別企画展「文人の行き交う街」
―近江商人が紡いだネットワーク―

九里了質
川嶋宗兵衛

地域を支えた
商人たち

伴蒿蹊
（1733～1806）



西川芸々斎
（1774～1844）

貫名菘翁
（1778～1863）

師弟関係

師弟関係

師の作品に
識語を書く

小林卓斎
（1831～1916）

谷鉄臣
（1822～1905）

日根対山
（1813～1869）

師弟関係

交流

巌谷一六
（1834～1905）

師弟関係？
漢詩を習っていたか？

野口小蘋
（1847～1917）

師弟関係

長三洲
（1833～1895）

ごあいさつ

近江商人ゆかりの東近江・近江八幡地域は、江戸時代以降、多くの文人が訪れ、商人の旧家には、貴重な書画作品が伝来しています。特に江戸後期には、「幕末の三筆」の貫名菘翁を中心に、小林卓斎、巌谷一六、野口小蘋など、文人たちのネットワークが築かれていた痕跡をたどることができます。

その背景には、文人たちを支える商人たちの活動があり、同地域の文人たちの交流は、彼らが紡いだものともいえます。また商人たちは、家業を通して故郷の寺院に様々な美術作品をもたらし、街には京都など近隣地域とは異なる文化が育ちました。

この展覧会は、地域の商人の末裔たちが大切に守り伝えてきた書画を通して、彼らが紡いだ文人たちの交流を探る試みです。同地域に伝わる知られざる文化財の数々を通して、この街の魅力を再発見してください！

最後にご協力を賜りました関係の皆さまに心より御礼申し上げます。

主催者

第一章　商人と寺院

東近江・近江八幡地域の文化財には、商人の庇護により受け継がれてきたものも多い。特に寺院の什物の集積は、商人たちの尽力によるところが大きい。

永源寺高野の九里氏や、五個荘川並の川嶋家など、地域所縁の寺院の所蔵品を紹介する。

○烏丸光広（からすまる　みつひろ）

（一五七九～一六二八）

江戸前期の公卿で、光宣の子。和歌、書に優れ、和歌は細川幽斎に学び、書は定家流、光悦流を学んだ。その書は、寛永の三筆とは一線を画す特徴を持ち、光広流という独自の書風を確立した。俵屋宗達、本阿弥光悦などの文化人や、徳川家康、家光などの武家とも広く交流した。また、沢庵宗彭や一絲文守に帰依し、禅を修めている。寛永十三年旧暦七月十三日に薨去。当初は霊源寺に葬られたが、後に孫の資慶が一絲文守を迎えて開創した法雲院に移された。

○白隠慧鶴（はくいん　えかく）

（一六八六～一七六九）

臨済宗僧。駿河国原宿の出身。十五歳で出家し、全国を行脚して美濃・瑞雲寺などで修業を重ねる。衰退しつつあった臨済宗の復興を果たし、臨済宗十四派から中興として尊崇される。禅の教えを説いた絵画を多く描き、その数は一万点にのぼるともいわれる。明和五年、出家地の松蔭寺にて示寂。

○東嶺圓慈（とうれいえんじ）

（一七二一～一七九七）

臨済宗僧。近江小幡町出町（現在の東近江市五個荘中町）に生まれる。父・中村善左衛門は薬業を家業としており、自宅に古月禅材を迎え入れたことにより、出家の志を持つ。その後、能登川大徳寺の亮山につき出家を遂げる。二十三歳の時、松蔭寺の住持・白隠慧鶴に資質を認められ、修行を重ねる。三十五歳の時、妙心寺にて初めて「東嶺」と号した。白隠が中興した龍澤寺を受け継ぎ、師が遷化するまで仕え、その寂後に火災に見舞われた同寺の再興を果たした。寛政四年、齢仙寺にて示寂。

第二章　貫名菘翁

貫名菘翁は、江戸後期に活躍した書画家である。徳島に生まれ京都に居を構えてからは、私塾を開き、多くの門人を育成し、さまざまな文人と交流した。菘翁たちは、たびたびこの地域を訪れているが、彼らの書画活動を　支えたのは、同地域の商人たちであった。

○貫名菘翁（ぬきな　すうおう）

（一七七八～一八六三）

阿波徳島藩の旧家である吉井家の二代当主・直好（直幸）の次男として生まれた。名は苞（しげる）、字は君茂（くんも）、子善などという。号は海仙、海客、海屋、海叟、摘菘人、摘菘翁、菘翁など多数を用いるが、海屋、菘翁（すうおう）が一般に知られているものである。そして菘翁の号は、七十一もしくは七十二歳頃から用いている。

菘翁は十七歳の頃、高野山に入山し、学僧・霊瑞の下で書や学問に励んだ。その際、高野山開祖である弘法大師・空海の真跡にふれてその書風を学び、その根底にある王羲之・王献之や褚遂良などの晋・唐の書風に目覚め、その法帖や碑文を収集した。

また、様々な文人たちとも交流した。二十二歳頃に入門した懐徳堂の中井竹山、中井履軒をはじめ、浦上春琴、江馬細香、梁川星巌、頼山陽と親交を持った他、自身の私塾「須静堂」の門人からは、日根対山や谷口藹山などを輩出している。

晩年の菘翁は、京都に住まいを構え、七十一歳の時には錦織里岡崎聖護院の地に移った際に、この土地に産する白菜の一種の「菘（とうな）」から取った菘翁の号を用いた。七十八歳の時に京都下鴨神社近くに新居を構え、この地で晩年の傑作の多くを生み出したという。八十五歳の時には中風を患ったものの、その後の書風は「中風様」と称され、気迫あふれる作品を多く残したのである。文久三年（一八六三）五月六日没。

○小林卓斎（こばやし　たくさい）

（一八三一～一九一六）

名は發、字は公秀、通称は卓蔵・熊次郎といい、卓斎・卓翁・大観・寿菴などと号した。山科家の家臣である小林佐兵衛の次男として生まれた。十八歳の時、貫名菘翁について書法・経学を学んだ。漢詩・篆刻も能くし、鑑定に精

通していた。

元治元年、幕末の騒乱激しい京都を離れ、近江八幡に逗留していた。明治元年には京都に戻り、日本最初の小学校である上京第二十七番組小学校の前身である有信堂で教鞭を執った。

第三章　巌谷一六

巌谷一六は、「明治の三筆」の一人として知られる書家である。近江水口出身で、明治政府に早く出仕した。一六もまた、この地域にたびたび滞在し、多くの書を遺している。

また、明治を代表する画家の一人・野口小蘋とも交流を重ね、ネットワークを築いていく。

○巌谷一六（いわや　いちろく）

（一八三四～一九〇五）

名は修、字は誠卿、一六、古梅、金粟などと号した。近江水口藩の侍医の家に生まれ、幼時から学を好んだ。明治維新後、政府に仕えて東京へ移動、後に貴族院議員となった。

書は初め、中沢雪城につき巻 菱湖風を学び、また趙子昂を好んだ。明治十三年（一八八〇）、楊守敬の来朝によって日下部鳴鶴、松田雪柯らと共に六朝書道の教えを受け、夥しい古碑法帖を研究し、その天分にまかせて新奇と飄逸さにまた別の新しい書風を生み出した。一六の書における起筆、ハライ、ハネに所々見られる三角形の形状は、六朝書風の影響が色濃く出ている。

第四章　文人の行き交う街

この地域は、近江商人の街として知られ、彼らの庇護の下で、多くの文人が逗留し、地域に書画を遺した。中には、書画の修行の場とする者や、商人でありながら文人活動を行う者もいた。文人たちはこの街を通してネットワークを築き、その後の糧としたのである。

○日根対山（ひね　たいざん）

（一八一三～一八六九）

字は小年、別号に茅海などがある。和泉国日根郡の出身。同郷の里井浮丘（さとい　ふきゅう）の元で中国絵画の臨模で研鑽を積み、岡田半江らと交流した。二十八歳で京都に出てからは、書と経学を貫名菘翁に学んだ。門弟には、野口小蘋の他、跡見花蹊らがいる。

○野口小蘋（のぐち　しょうひん）

（一八四七～一九一七）

名は親、字は清婉、号は最初、玉山を用いた。大坂に生まれる。八歳で四条派の角鹿東山に師事する。万延元年（一八六〇）頃から、父・春岱と共に越前を遊歴した。名古屋で父が病に倒れ、文久二年に亡くなると、三回忌を迎えるまで名古屋に滞在した。その間、残された母とともに生計を立てるため、八幡で絵画を売っていたという。

慶応元年（一八六五）、十九歳の時に、京都の日根対山に入門、その後、明治元年頃までには小蘋と号するようになる。明治四年（一八七一）に上京し、多くの書画家と交流する。明治十年（一八七七）、実業家の野口正章と結婚、甲府に移住する。翌年には、娘・郁（後の小蕙）が生まれた。義父の野口正忠（号は柿邨）が多くの文人と交流しており、その影響と義父の支援を受け、優れた作品を多く遺した。大正六年二月十七日逝去。

○野口小蕙（のぐち　しょうけい）

（一八七八～一九四五）

名は郁。東京・麹町区にて、野口正章・小蘋夫妻の長女として生まれる。その後、両親とともに甲府に移って幼児期を過ごし、六才でふたたび上京する。絵画を母・小蘋に学び、十四才の時に日本美術協会展に初入選した。

大正十二年（一九二三）、四十六歳の時、関東大震災を機に住居を兵庫県西宮市甲東園に移した。昭和二十年四月二日逝去。

○野口謙蔵（のぐち　けんぞう）

（一九〇一～一九四四）

蒲生郡桜川村綺田（現在の東近江市綺田町）の出身。東京美術学校に入学し、黒田清輝、和田英作に師事する。卒業後、帰郷し、平福百穂、野口小蕙に日本画を学ぶ。病による四十三歳という若さで亡くなるまで、故郷の蒲生野の美しい風景を描き続けた。

○谷　鉄臣（たに　てつおみ）

（一八二二～一九〇五）

字は百錬、太湖などと号した。幕末から明治時代の武士、官吏。彦根に生まれ、実家は町医者を生業としており、鉄臣は長男であった。江戸、長崎で経学、蘭方を学んだ後、家業を継いだが、文久三年に彦根藩士に取り立てられ、藩の外交を担当する。維新後は、新政府の左院一等議官となった。

第五章　近江商人がもたらしたもの

商人たちは、商売による往来を通して、中国・明時代の書画など、多くの文化をもたらした。商人たちのネットワークによって、この地域には、すぐれた書画作品がもたらされ、書画家たちがその影響を受けた作品も多く遺されている。

○隠元隆琦（いんげん　りゅうき）

（一五九二～一六七三）

日本黄檗宗の祖。福建省福州府の出身。長崎興福寺の住持であった逸然性融の招聘により、承応三年（一六五四）に長崎へ来港した。翌年、崇福寺へ移ったが、妙心寺の元住持であった龍渓性潜の請いにより、摂津普門寺へと移る。幕

府によって活動を制限された時期もあったが、四代将軍徳川家綱との面会を経て、万治三年（一六六〇）、山城国宇治郡に萬福寺を開創した。近江とも所縁が深く、同年には永源寺を訪れ、当時の住持・如雪文岩と邂逅している。

○逸然性融（いつねん　しょうゆう）

（一六〇一～一六六八）

中国・浙江省杭州の出身。薬種商として長崎に渡来し、肥前興福寺の二代黙子如定に帰依して出家し、後を継いで住持となる。浪雲庵主と号した。道釈人物画に優れ、多くの作品を遺した。逸然は、当時中国の黄檗山にあった隠元を日本に招聘したことで知られる。

○雲谷等与（うんこく　とうよ）

（一六一二～一六六八）

名は就直。等益の長男。長門萩藩に仕え、雲谷派宗家を嗣いで、「雪舟五代」と称した。明暦元年、弟の等爾等と共に、京御所の障壁画制作に加わったことが知られる。

○河村若芝（かわむら　じゃくし）

（一六三八～一七〇七）

肥前佐賀・竜造寺家の出身。逸然性融に師事し、師の画風を受け継ぎ、発展させた長崎派の画家。長崎において、当時としては目新しい明末清初の絵画作品に学び、その強い影響の中で、独自の画風を確立・展開させた。その作品は、五十件以上が知られているが、晩年作の中には、弟子の若元による代筆、工房による作品も含まれている。

また剣鐔の造型に長け、若芝鐔工派の開祖としても知られている。

○高田敬輔（たかだ　けいほ）

（一六七四～一七五六）

名は隆久。三敬、眉間豪翁、竹隠斎などと号した。近江日野杉野神町に生まれる。実家は日野椀、製薬業を生業としていたが、敬輔は絵画を能くし、はじめ狩野永敬に師事した。後に、画僧・明誉古磵（みょうよ　こかん）に学んだ。一時、京都に住むこともあったが、各地を歴遊した。晩年、江戸・神田に滞在し、八代将軍・徳川吉宗に拝謁している。その後は、故郷の日野に隠棲した。その弟子の一人に、曽我蕭白（そが　しょうはく）がいる。

◆作品の画像・釈文は、すべて展覧会図録に掲載されています。

展覧会図録の詳細は、館内の書籍コーナー、及びホームページをご覧ください。

２０２１年９月18日　印刷　出版
編集・発行
公益財団法人 日本習字教育財団　観峰館
所在地　〒５２９-１４２１
滋賀県東近江市五個荘竜田町１３６
ＴＥＬ ０７４８－４８－４１４１
ＦＡＸ ０７４８－４８－５４７５
https://www.kampokan.com